

序 文

本企画のお話をいただいたときに同門の先輩である編集委員のK先生から最初に伺ったのは、「小児は難しいからとっつきやすいのにしてな!(関西弁)」でした。小児の画像診断は難しい……ということを意外によく聞きます。しかし、KEYBOOKシリーズなど、比較的平易に疾患を紹介している書籍もよく目にしますし、自分も原稿を依頼されるときに初学者にわかりやすくということを期待され、そのように書いています。それでも小児の画像診断は難しい……。

確かに、疾患を平易に書いてある書物はみなのですが、画像をみて何の疾患かわからないところに、「こんな疾患を考えたらい」というようなアドバイスのような指南書はあまりお目にかからないなあ、と感じます。また、日頃小児ばかりみている専門施設の先生が説明するのと、小児疾患に詳しいgeneral radiologistに教えてもらうのとでは、小児画像に対する目線や指南の仕方が異なり、理解しやすさが違うのではないかと推測しました。

そこで、まだ小児に毒されていない(?) general radiologistの目を持った先生方から、独自の経験から役に立つと思われる疾患を選んでもらって、専門外の先生に解説していただくことを企画しました。

一方で、いつも小児の企画をじっくりと読んでいただいている読者の中には、小児専門施設の先生や、小児に造詣の深いgeneral radiologistも多いと思います。彼らにとっても、ある程度骨のある興味深い内容も含める必要があると思いました。そこで、本増刊号ではcase-based reviewを基本とし、1ページ目に出題するように画像を提示し、2ページ目に結果が出るように解説していただきました。疾患の説明は最低限にして、先輩からのアドバイスの体で端的にまとめてもらっています。空き時間でも「ちょっとみてみようかな」と思ってもらえるのが狙いです。疾患は比較的平易なものを中心に、臨床的に重要であれば、最近話題のものや珍しいものでも、積極的に取り上げていただいております。

最後に、お忙しい中ご執筆いただいた先生方に感謝申し上げます。当方の意図するところがわかりにくかったことと思いますが、それぞれに厳選した症例を簡潔にまとめてくださり、読みやすい特集となりました。本特集が読者の記憶に残り、たまに回ってくる小児の画像をみたときに、「あ、これあれに載ってたやつや!(関西弁)」と思い出していただけることを期待します。

令和6年8月

兵庫県立こども病院放射線診断科

赤坂 好宣